

## 退院後はじめての仕事は「がん」についての講演

リスト・U

「リスト・U」はペンネームです

退院後はじめての仕事は、千葉県市川での講演だった。テーマは、皮肉にも「がんはもう怖くない」ここまで来た最先端治療である。以前からお付き合いのある保険会社からの依頼で、当時私はこのテーマで、ちち講演をしていた。まさか自分ががんになるとは考えてもみなかつたが、今回はそれには触れずに、一般的ながんの話をすることになっていた。

終了後、主催者からお土産の菓子と大きな花束をもらつた。これもよくあることで、とてもありがたくて嬉しいのだが、さすがにこのときは重い荷物を両手に持たねばならず少々辛かつた。

彼は名古屋からはずつと付き添つてくれていた。しかし講演先に顔を出すわけにはいかず、東京駅で待ち合わせをしていたため、市川から駅まではひとりで行動しなければならなかつた。手術をした側の左腕は、上げたり回したりするは一向に構わないが、重い物を持つたり抱えたりするは極力避けなければならない。また、怪我をしないように、虫さされには気をつけるように、とも言われていた。バッグと菓子箱と花束ー、全部を右腕で持つのは無理なので、バツグと菓子箱は右で、花束は左腕で支えるようにして持ち、何とか体勢を整えた。まさか私がほんの一週間前にがんの摘出手術を受けたとは誰も思わない。にこやかに挨拶をして、講演先を後にした。

乳がんの術後は、患部側の腕がむくんだり、しびれや腕が上がらなかつたり、などなどの後遺症に悩まされることが多い。そのため早めにリハビリをするのだが、ど

ういうわけだか手術後何年も経つてからむくみが出ることもある。その後ずっと、採血や血压測定をする際にも、健側の腕、つまり私の場合は右腕を使わなければならぬのだ。幸いにもしびれや腕が上がらないなどといったことはなかつたが、むくみ予防のために病院で教えてもらつたリンパのマッサージはせつせと続けていた。

私は、市川での講演のように、これまで多くの人を対象にがんの話をしてきた。がんの予防から治療まで、難しくなりがちな話をやさしく話すことをこころがけたこと、もあって、わかりやすくてためになると、それなりに好評であった。でも、実際に自分ががんになり、改めてこれまで話してきたことを思うと、顔から火が出そうなほど恥ずかしかつた。

私は何もわかつていなかつた。がんなり立ちや基本的な予防や治療については知つていても、がんになつた人の気持ちや戸惑い、手術後の副作用や再発の恐れなど、全くわかつてはいなかつた。どんなことでも、その身にならなければひとごとなのだということを心底思い知らされたのだ。打ちのめされたような、おのれの未熟さや傲慢さを突き付けられたような、何とも表現しがたい気持でいっぱいだつた。どんなんことでもうしても振り返つてしまします。

ヒロシマとナガサキを経験したわたしたちが、なぜ「フクシマ」を起こしてしまつたのでしょうか。音藤とも子さん（『きのこ雲の下から、明日へ』著者）がかわつていらつしやる原爆小頭症の方期に発見できれば命に関わることはない。私の場合も、「よく見つけたね」と褒められるほどに早期だつたのだから、再発とか転移などということはこのときは頭になかなかつた。大きな傷と小さくなつた膨らみは悲しいといえば悲しいが、それもがんを退治できたという喜びの前にはそれほど苦痛だとは思わなかつたのである。

# 本をつなぐ 5

## 波瀬万丈の歴史口マン

—いつも感動は驚嘆に変わり、驚嘆は再び感動に変わり、この二つの作用のどちらからも逃れられない。

これは、刊行当時のゲーテの感想である。

イタリア文学の最高峰として、ダンテの『神曲』と並び称せられるこの小説を、日本人の多くは未だに知らない。勿体ないことだ。

私が初めてこの小説を読んだのは、二十五年以上前のこと。當時はイタリア人神父の手による翻訳が『婚約者』といふ表題で岩波文庫に入つていて。この翻訳の和文には問題もあつたようだが、私には物語の展開が十二分に面白く、一気に読み終えて、深い感動を覚えたという記憶が残つている。

MANZONI



◆いいなづけ 17世紀ミラーノの物語 全3巻 ◆著者：アレッサンドロ・マンゾーニ  
◆定価：各巻1050円◆発行：河出文庫◆ISBN4-309-46267-7(上) ISBN4-309-46270-7(中) ISBN4-309-46271-5(下)

—アは、邪な心を抱く暴虐な領主に結婚式を挙げてはならぬと脅迫され、そこから二人の苦難が始まる。逃亡、飢餓と暴動、ペストの蔓延、外国軍の侵入など、形の妙など、その魅力は容易に語りつくせない。しかし、イタリアはおいしいだけではないのだ。

日本

人の誠実な読者であれば、この小説によつてヨーロッパのキリスト教社会という怪物的多面体に直面されられ、打ちのめされる、打ちのめされるであろう。私は今回、三度目を読了して、再び日本人であることを思い知らされた。

十九世紀初頭に書かれたこの小説は、それよりさらに二百年前の十七世紀の北イタリアの、ミラーノとその近辺の地方を舞台に繰り広げられる波瀬万丈の歴史

鞍貫正法

## 編集後記

私は何もわかつていなかつた。がんなり立ちや基本的な予防や治療については知つていても、がんになつた人の気持ちや戸惑い、手術後の副作用や再発の恐れなど、全くわかつてはいなかつた。どんなことでも、その身にならなければひとごとなのだということを心底思い知らされたのだ。打ちのめされたような、おのれの未熟さや傲慢さを突き付けられたような、何とも表現しがたい気持でいっぱいだつた。どんなんことでもうしても振り返つてしまします。

ヒロシマとナガサキを経験したわたしたちが、なぜ「フクシマ」を起こしてしまつたのでしょうか。音藤とも子さん（『きのこ雲の下から、明日へ』著者）がかわつていらつしやる原爆小頭症の方期に発見できれば命に関わることはない。私の場合も、「よく見つけたね」と褒められるほどに早期だつたのだから、再発とか転移などということはこのときは頭になかなかなかつた。大きな傷と小さくなつた膨らみは悲しいといえば悲しいが、それもがんを退治できたという喜びの前にはそれほど苦痛だとは思わなかつたのである。

### お知らせ

ゆいばおとでは、みなさまの作品や経験を本にするお手伝いもしています。随筆集、紀行文、自分史、歌集、句集、写真集、絵本などをあってみたいとお考えの方は、お気軽にお問い合わせください。

編集・出版 ゆいばおと

TEL 052-955-8046

Eメール yuiyama107@wine.ocn.ne.jp

### 「ゆいばおと」バックナンバー

創刊号インタビュー／横幕真紀さん（『ずっとそばにいるよ』著者）

「ありがとう」を伝えたい！

2号 インタビュー／音藤とも子さん（『きのこ雲の下から、明日へ』著者）

「きのこ会」を次世代につなぐ

3号 インタビュー／堂本暁子さん（『生物多様性』著者）

「COP10」の成果を未来につなぐ

4号 インタビュー／茶畑和也さん（イラストレーター）

そろそろ進むことにブレーキをかけないといけない

\*ご希望の方には送ります。無料です。

### ▲「本をつなぐ」原稿募集中！

その本を知ったきっかけを入れて、おすすめのコメントを600字程度でまとめ、有限会社ゆいばおと（表面参照）までお送りください（メール、ファクシミリ、郵便で受け付けます）。採用の方には記念品も準備しています。